

# デジタル化への不安の根源を知る

「多孔化」する社会での「協働」とは



インタビュー

## 鈴木謙介

Suzuki Kensuke

関西学院大学社会学部准教授

脇坂敦史構成  
宮村政徳撮影

当初は4台のコンピュータを電話回線ですらないで始まったとされるインターネット。それから約50年、今やデバイスは手のひらにおさまるスマホへと変化し、誰もがいつでもネットにつながれる社会が到来した。

技術の進展とともに、日常のコミュニケーションから社会の仕組みまであらゆるものが様変わりしたが、我々はその変化を本当に理解しているだろうか。変化の本質を捉えきれないことで、不安をかき立てられているのではないだろうか。そこで、2000年当初から、インターネット文化についての考察を重ねてきた社会学者の鈴木謙介准教授に、デジタル社会への不安の根源についての解説と解決の糸口について示唆をいただいた。

### コミュニケーションをもちはじめた

僕が『暴走するインターネット——ネット社会に何が起こっているか』（イーストプレス）や『カーニヴァル化する社会』（講談社現代新書）を執筆した2000年代初期は、ある種の端境期<sup>エッジ</sup>でした。国の政策も全国にインターネット通信網を張り巡らせるためのインフラ整備から、利活用を促すという課題へシフトしました。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）が登場し、情報の主役も自治体や大学・研究機関といった公的なものから、普通の人々がコミュニケーションを行うためのものへ変わっていきました。

それが社会と個人、個人と個人

の関係はどう変えることになるのか？ 専門家や技術者だけではなく、僕のような社会学を専門とする人間にとっても、インターネットをはじめとする新しいデジタル技術について、考察したり研究したりする余地が生まれたのです。

その後、2010年代に大きな変化が起きました。コミュニケーションのなかに「コンテンツ性」が加わるようになったのです。言い換えると「伝える」ことより「見られる」ことを目的としたコミュニケーションが、普通の人々の友人との関係にも入ってきた。Instagramのストーリーには、友人とカフェでお茶をしている様子が投稿されます。それは、友人と語らう時間を人に見せるためのコンテンツにしているということでも

もあります。このような変化は、オンラインの関係についてこれまで社会学が考えてきたことを変える必要性を示唆しています。

最近、アンデシュ・ハンセンの『スマホ脳』（新潮新書）といった本も話題になっていきます。以前の社会学なら、この議論は否定的に扱われていたはずですが。なぜなら、依存状態になるのはスマホのせいではなく、友人との人間関係が原因だとみなしていたからです。ところが、自分のコミュニケーションを「見られる」ための資源として利用し、「いいね」などの反応が即時に返ってくるようになると、理性で考えるよりも先に快楽が得られてしまう。気づけばYouTubeやTikTokを見続けて一日が終わってしまった、自分は一体何をしていたのだろう。コロナ禍での若者の過ごし方についてヒヤリングすると、そんなエピソードが多々聞かれます。

ただし、若い世代がみな自分の日常を「見られる」ために発信しているわけではありません。SNSで積極的な情報発信を行っているのはごく一部で、多くの若者は

SNSのコミュニケーションを「コンテンツ」として消費するに留まります。

昨年、ある学生からコロナ禍での「SNS断ち」に関する意欲的な発表がありました。彼が一番困ったのは、Twitterでないこと。ニュースを見られず、世の中で何が起こっているのか分からないということでした。若い世代の情報行動は、受動的なフィルターとしてSNSを使う傾向が強い。コンテンツ性の高い情報発信をしているのは、全世代を通じて一部の層だけ。スマホを触っている時間は長くても、若い世代の多くは受け身に留まり、ウェブ・サービスの機能を十分には使いこなせていないと感じています。

### コロナ禍で加速した現実の「多孔化」

一方でコロナ禍は、デジタル化による社会の変化を加速させました。スマートフォンによってコミュニケーションが持ち運べるものとなり、「物理的な環境」から切り離される。今一緒にいる人と、インターネットを介してつながる



琴平バス（香川県）によるZoomを利用した「オンラインバスツアー」では、バスを実際に運行しながら画面上に名所を映し出すだけでなく、土産物店などの中継も実施し購入することもできる。事前に送られてくる手づくりのしおりやシートベルト、ご当地の特産品などで、参加者がその空間をより共有しやすくなる工夫もされている。

の研修などでも同じようなことが言えるでしょう。たとえばオンライン入社式で社長が長い話を始めたとき、画面の前でどういう姿勢をとるべきか？ 僕だったら、横になってしまいかもしれません（笑）。かつての入社式では、半分眠くなってきたけど隣のやつもちゃんと聞いているし……と思う

緊張感を保っていたわけです。それならビデオをオンにして空間をいけば強制的につなぎ、聞いている姿を見せろという話になったりするわけですが、それも違うなあと感じる。何がなんでも「対面」に戻すのではなく、「対面」で得られていたものをどう取り戻すのか？ あちこちで試行錯誤が始まっています。

対面とオンラインのハイブリッド的な手法として最近注目されたもののひとつが、「モノの共有」です。香川県の琴平バスが企画したオンラインバスツアーが昨年、すごく話題になったのですが、ツアーの一体感や「参加意識」を高めたもののひとつが、食事の時間を共に持つことでした。食べるという行為を共有することで、単に観光地をビデオ映像でめぐるだけのコンテンツが、本当の意味で楽しいバスツアーになりうる。これをヒントに、オンライン研修でも多くの企業が「一緒にお弁当を食べる時間」を取り入れました。このバスツアーでもうひとつ秀逸だったのは、段ボールでできた手づくりのシートベルトです。こ

ニューヨーク5番街の街並みを撮影した写真。1900年（右）は、馬車が道を埋め尽くしているが、1913年（左）には、T型フォードと呼ばれる自動車ばかりが走り、わずか3年で風景が一変した。出典（右）U.S.National Archives and Records Administration, Records of the Bureau of Public Roads（左）Library of Congress Prints and Photographs Division Washington, D.C.



れもコロナ前から顕著な傾向ですが、若い人を中心に他人との距離を必要に応じて選びたいという人が多くなっている。たとえばシチズン時計の調査（2019年）では、「ビジネスの忘年会で適当な時間」として「30分以下」を選んだ人が14・8%にものぼりました（図）。僕などは、忘年会が30分で成立するとは思えないのですが、業務以外の付き合いを強いられるのはおかしいと言われれば、そうかもしれないと思う。これまで当たり前とされてきたさまざまなことを窮屈と感じる人が増えているし、「選べた方がいいよね」という流れは理解できる。

ただ、それで効率的になるなら、その方がいいと思います。人々が「協働」することによるメリットや意義を考えると、そうとばかりも言えない。「協働」というのは、組織中心でも個人中心でもない、多様な人々が異なる能力や価値観を生かしながら協力しあうあり方であり、これからの社会が目指すべき道だと僕は思っています。だとすると、大学であれば会社であれ、そこに集まる理由、「対面」

これもコロナ前から顕著な傾向ですが、若い人を中心に他人との距離を必要に応じて選びたいという人が多くなっている。たとえばシチズン時計の調査（2019年）では、「ビジネスの忘年会で適当な時間」として「30分以下」を選んだ人が14・8%にものぼりました（図）。僕などは、忘年会が30分で成立するとは思えないのですが、業務以外の付き合いを強いられるのはおかしいと言われれば、そうかもしれないと思う。これまで当たり前とされてきたさまざまなことを窮屈と感じる人が増えているし、「選べた方がいいよね」という流れは理解できる。

ただ、それで効率的になるなら、その方がいいと思います。人々が「協働」することによるメリットや意義を考えると、そうとばかりも言えない。「協働」というのは、組織中心でも個人中心でもない、多様な人々が異なる能力や価値観を生かしながら協力しあうあり方であり、これからの社会が目指すべき道だと僕は思っています。だとすると、大学であれば会社であれ、そこに集まる理由、「対面」

れも事前に送っておいて、「出発しますので、シートベルトをつけてください」と呼びかける。ただの遊びみたいですが、これって儀礼の本質だなあ、と感心させられました。バスという空間を共有していなくても、同じことをしてまですよというサインを送り合うということが出来る。人々が共有する「設定をつくること」を、社会学では「状況の定義」と呼ぶことがあります。「共有していると感じられること」が、対面かオンラインかを超えて重要でした。

「デジタル化への不安」その奥底にあるものとは何か？

デジタル化にともなう不安の背景には、自分の行動がデータとして扱われ、悪用される可能性はないのか？といったデータの過剰な利用への心配があるでしょう。ただ、そのことを話す前提として、日本ではデータの取得や活用といった面で遅れに遅れていることが、この1年半で明らかになってしまいました。マスクやワクチンの在庫がどこにどれだけあるのか？ そんな情報すら満足に使えない状態に

でやる理由みたいなものを問い直し、新たにつくっていく必要がある。協働するためのスキルや「構え」といったものが、ますます重要になってくると考えています。

「対面授業」に何を望むのか？

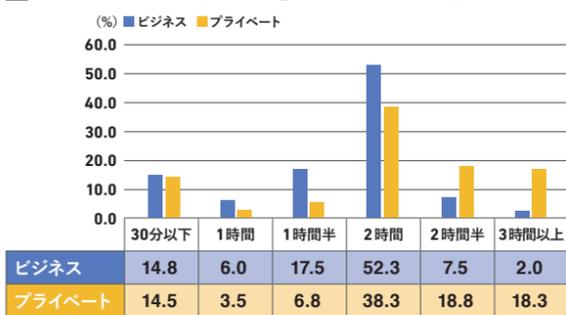
もちろん、「対面授業」へのニーズがなくなったわけではありませんが。隣に座っている人と会話するわけじゃないけれど、人が隣にいて同じ授業に参加していると安心できるとか、集中力を保てるとかいう話はよく聞きます。企業

あるのに、使うべきか？ それは危険なのか？といった議論をしてもかみ合わない。

若い世代の間では、データを提供することへの忌避感、この数年で大きく減りました。たとえば、あるウェブサイトで見た商品が別のSNSの広告に出てくるのを気持ち悪いと感じる学生が、今はほとんどいない。データの活用を日常的に経験していて、レコメンドエンジンによって表示される推奨データを自分で調整し育てていくという感覚が強いのでしょうか。だから社会を改善するために個人のデータが活用されることにも、あまり抵抗がない。

それでもなお多くの人が感じるであろう「デジタル化への不安」の根源的な理由は、フリー（自由であり無料でもある）かつオープンであるという、インターネットの設計思想であると僕は思います。かつて王や貴族、教会が独占していた情報や権利を市民革命や宗教革命によってみんなのものとした。そうした西欧の歴史の延長線上で、自由でオープンな、誰もが参加できるものがないよね、という思想

図：「忘年会の適当な時間」に関する意識調査



出典/シチズン時計「令和初の『忘年会&年末行事』調査」（2019年11月20日）※調査対象は全国のビジネスパーソン400人（20代・30代・40代・50代以上の男女各50人）

